

久保克児著『佛をもとめる心』を読んで

酒 井 郊 実

昭和 50 年（1975 年）10 月 8 日に初版が発行されてから 46 年になります。当時、19 歳だった私は、インナートリップ運動に邁進していました。私を導いてくれた先輩は霊友会の教えを情熱的に活動している人でした。『久保角太郎 父母双系の先祖供養仏教誕生』の中に、「セルフアイデンティティ」という言葉が出てきますが、当時の彼も私に「泥まみれになってもいい、真剣に生きていこう」と言い、「セルフアイデンティティ」なんだと、双系の先祖供養の教えをもって自己確立していくんだ、それが原点だと導かれました。自己確立していくというのがどういうことかつかめないまま、他人を導いていくとわかるということで私のインナートリップ活動が始まりました。

久保継成会長の『いんなあととりっぷ—人間の心にかえろう』（昭和 46 年 11 月発行）が出版され、内容は 50 人の日常の実感が語られた本でした。

「生きる」ということ、「生きている」ということ、それは人と人とのめぐりあい、かかわりあいそのものだと思う。インナートリップ——めぐりあいを互いに影響しあいながら育てる世界」

と、巻末に結んでありました。創刊された『いんなあととりっぷ』誌を持って語り、友達との関わりを求めて活動をする中、久保克児先生が初めて本を出された。書籍タイトルが『佛をもとめる心』。それ以来、考え方のバイブルの一つになっています。いろんな作家の言葉を引用して、「身のまわりの仏教」を克児さんの視点で書かれてあります。仏教の考え方を通して生きる智慧が読み解かれてあり、女性として先を行く先輩の後を少しでも近づいて生きようと思いました。

弥勒山にて克児先生が私たち青年部を前にヘルマン・ヘッセの「シッダールタ」のお話をされたのが印象的でした。『佛をもとめる心』の文中にも出てきます。

161 頁

「大多数の人間は、散り落ちる葉に似ています。風に吹かれ、空中に舞い、ひらひらとよろめいて大地に落ちます。ほかに少数ながら星に似ている人があります。固定した軌道を進み、どんな風にもとらえられません。自分自身の中に法則と軌道を持っています。」——他人の思想や観念によってではなく、己れ自身の主体的判断のもとに生きる人ということです。——悟りという何かを求めて生きるのではなく、日々を自分の思いのままに生きて苦痛を知らないという、そういう生き方です。

自分の思いのまま生きて苦痛を知らない——そんなふうに生きていけるのだろうかと思ったものです。自分のあずかり知らないところからも苦通や悩みが起きてくる。家業の倒産で多感な中学生時代の経験を通じて幼い考えですが、苦痛を知らない生き方という言葉に感化され、どうして生きていくかを思ったものです。

また、晩年の会長ご夫妻の近くにいて、何度か聞いた『神州^{こうけつ}纈纈城』(国枝史郎著)の話。これも『佛をもとめる心』の中に「懺悔」(140 頁)という頁で取り上げられています。キリスト教用語のザンゲと仏教の言葉のさんげを国枝史郎の著書を題材に克児先生の視点で書かれています。

143 頁

仏教の懺悔という行為は、安易な生き方に流れようとする自分と、それに逆らうもう一つの自分の心との戦いであり、いわば主体的自己の確立の方法論でもあるのです。単なるカタルシス(気晴らし)でもなく、自己満足でもありません。非常に厳しい自己練磨の方法であり、主体性の要求される行為だと言えそうです。

145 頁

「悪い事をした時が悪人」—国枝史郎(『神州纈纈城』)
鳥刺しの少年が、極悪人の面を作ろうとしている女面打師に言います。「悪人なんていう者も、善人なんていう者も、此の世に一人だって有りゃあしないよ。悪い事をした時が悪人で、善いことをした時が善人さ。」

女面打師は、この少年の言葉にショックを受けます。なぜなら、それまで彼女は、悪人という人間と善人という人間がいたと思っていたからです。——こういう真実にぶつкаると、“ああ、そうだったな”と、改めて自分の心をふり返ることになります。

147 頁

自分だけは、いつでも絶対に正しいと思いこんで、我が身の内なる弱さや悪を自覚できないでいる人たち——私はそういう人たちこそ、恐ろしい存在だと思うのです。

ここで著者は、「人間の真実をついた言葉だと思いませんか？」と問われている。あらためて読みかえしても、人間の心というものが「内なる弱さや悪を自覚できない」ということに気づけるかにつきると思われまゝ。他人と「聞く 語る」の関係から自分をふり返って気づいていくことかなと思わずにはいられません。気づい

ては懺悔を繰り返す、自分なりに懺悔を考えると、「立ち止まって、ふり返って気づいて、自分をどう受けとめ受け入れる」を行うことだと最近、思っています。

今まで自分の心を見つめる、ふり返る、考えることで自分自身に気づいても、頭で理解していただけでした。だから他人と接していてもどこかで自分を正当化している。相手の立場を考へがえられない、自分の考え方を過大評価しているところがありました。自分を受け入れるも、受け入れられるのは良い自分だけで、ダメなところは受け入れられない。常に正しくあらねばならない強迫観念にハマった時期もありました。自分の考えは「人間、為せば成る…」の精神でどこまでもきました。そんな私は恐ろしい存在であったと思います。そういう自分に気づき、ようやく身に沁みてきました。「内なる弱さ」を自覚し、自分を受けとめ受け入れられました。

147 頁

自分の心というものが絶えずゆれ動いているものである、ということに気づいていないからではないでしょうか。いったん“私は悪いことはしない”あるいは“俺は目的に向かって全力投球するんだ”と決意したら、もう金輪際その心が変わらないものと思いこんでいるからではないかと思うんです。

人間の心はそんなわけにいかないことを、先の先輩であった夫と生き別れの経験をし、家庭崩壊をくぐりぬけながら母子家庭で息子たちを育てました。その心というものは一瞬たりとも、同じ状態でいることはないのだとさとしたつもりでいましたが、まさに日常は「心根は猿猴の如くにして」の通りでした。今も心はふらふらゆらゆらざわざわとする日もありますが、毎日の生活で少しは気づいたぶん、心が穏やかでいられます。

霊友会時代から半世紀、おかげさまで今やっと、懺悔の心で人生を処し生きたいと思うようになりました。この本と共に「自分はこれでいいのだろうか」というの発想を忘れずにこれからも行きたいと思っています。今年 1 月で 65 歳になりました。心から楽しめる「しあわせになる」を実感する日が少しずつ増えてきました。

この本を読んで、克児先生の応援歌が聞こえるような感じがしました。

「誰からも特に振り返られることなく、黙々と生きている人。みんな、それぞれに苦しみや悩みを抱えて生きているのです。過ぎ去った日々も、そして今も——。現実から逃避したいなんていうのは、日常茶飯事じゃあないでしょうか。でも逃げない、死なない、それが“普通の”人です。——過去の数々の苦悩のゆえに現在の自分がある」と。普通の人で“精一杯生きよ！”と克児さんの声が聞こえてくるようです。